

観 測 部 月 報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東 亞 天 文 協 會

★**彗星課** COMETS 明18年に歸來すると思はれる週期彗星は下の4つである。

第2 ネウイミン星 (NeujminII) [1927 I]	週期5.43年,	近日點通過四月。
ダレスト星 (D'Arrest) [1923 II]	6.68年,	九月。
ダニエル星 (Daniel) [1937 I]	6.82年,	十一月。
ショーマス星 (Schaumasse) [1927VIII]	7.93年,	八月。

何れも過去に2回以上発見されたもので、ダニエル星は廣瀬秀雄氏の計算豫報と清水眞一氏の発見とによつて1937年以來確實になつたもの。他の3星は最近の1~2回の歸來に発見されなかつたものであるが、今回は好都合と思はれる。詳細は本誌次號の年鑑を見られよ。(進)

★**太陽課** SUN (1942年九月分) 幹事 大石辰次 (T. Oisi, Secretary)

追加報告. 山田勇次氏, 四月分, 日數7日, 相對數平均38.4.

西尾利夫氏, 一月分, 日數21日, 相對數平均30.2.

同氏, 七月分, 日數20日, 相對數平均15.3.

黒點概況. 前月より續いた一群は6日頃より活潑となり9日に西没した。13日東現の單獨有核點は殆ど原形のまゝにて西没した。22日東現の一群は23日は双頭型を示したが崩壊して26日消失した。上記外に4群程短期或は淋しく見られた。

観測状況. 本月も保積氏の24日は最高であるが、報告が個々の群別の詳細が記されず、爲に残念ながら比較研究に價値が割引かれて了つた。津留氏とは密接な連絡を持つて居るが、本月の15日は天候とは曰へ残念であつた。高杉氏の報告からは良い暗示を得た。上旬終りに東半球に出現した一群は、観測したのは筆者のみであつた。

雜報. 新に植田耕作氏を迎へました。明星観測報告は一部訂正しました。(個人名の報告を望む)

観測地, 位置, 口径, 倍率器械, 方法等の不明, 落記が一般に多い。或は變更も理由を明かにして戴き度い。本月18個中完全なものは9個であつて他は缺除した所があつた。

氣象記號を使用する人が二三ある。之は排す可き事ではなく、寧ろ面白く、我等の部門にも斯うした傾向は歓迎する。發案者は是非實行に移して下さい。

太陽黑點相對數報告 (1942年九月) Sun-spot Relative Nos., September, 1942.

觀測者 Obs. (觀測地)	寺師・後藤 坂上 務 Su M.N. 西山 峰雄 M.N. 津留 繁雄 Tr 疋田 源一 G.H. 西尾 利天 No 明星觀測班 K.U. 植田 耕作 Qs 笠井 泰雄 Qs 木邊 成麿 Kb 竹内 潤 Tu 金田伊三吉 Kd 沓掛 七二 Kk 大石 辰次 Oi 保積善太郎 Hs 高杉 重春 Tl 西卷 辰雄 T.N. 山田 勇次 Yy																觀測個數 No. of Obs.		
	(七高天文部) (鹿兒島市) (福岡市) (熊本市) (大阪市) (大阪市) (大阪市) (大阪市) (京都市) (滋賀縣) (名古屋市) (石川縣) (長野縣) (靜岡縣) (東京市) (東京市) (東京市) (東京市)																		
口徑 mm	135	42	32	122	38	105	150	32	45	75	32	55	102	55	75	55	75	75	十八名中
倍率 x	71	64	45	48	65	75	60	40	53	60	50	64	75	64	64	64	46	80	
方法	P	P	D	P	D	P	D	D	D	D	D	DP	DP	D	D	DP	P	D	
1	M	M	0	22	11	11	0		11	22	0	R	R	11	11	11	11	13	
2	M	M	0	13	0	0	C		12	12	0	0	C	0	0	0	0	12	
3	M	M	0	27	0	27	0		12	17	0	13	28	13	13	25	22	14	
4	33	M	0	25	C	M	0		C	M		25	C	R	C	R	C	4	
5	34	M	0	28	13	0	0		26	40	0	28	C	C	R	R	C	10	
6	M	M	13	14	13	M	M		13	17	16	M	C	17	13	14	C	9	
7	M	M	16	31	M	C	22		C	22	15	M	31	28	18	26	47	11	
8	18	M	15	17	M	M	26		13	22	16	15	C	40	18	15	21	13	
9	18	M	M	16	16	16	18		13	17	0	15	C	27	18	14	17	14	
10	M	M	M	22	0	0	C	0	0	12	0	12	C	0	0	0	M	12	
11	C	M	0	11	0	0	0	0	0	0	M	0	R	C	0	0	0	13	
12	M	M	R	C	12	0	0	0	0	M	0	R	C	12	12	12	C	9	
13	M	M	12	23	23	23	0	0	0	M	0	R	C	23	23	23	12	12	
14	25	M	22	R	23	34	14	0	12	M	0	C	C	36	36	23	M	11	
15	C	M	22	R	R	R	R	0	22	R	0	24	C	24	R	R	R	4	
16	C	M	11	12	M	12	C	M	22	M	15	25	13	23	24	12	14	12	
17	M	M	11	R	C	M	15	C	C	12	16	R	C	C	11	M	C	6	
18	12	M	11	R	11	11	15	11	35	11		C	C	23	C	R	C	9	
19	R	M	R	R	11	11	11	M	R	11		R	C	R	R	R	R	4	
20	R	M	C	R	R	R	?	R	R	R		R	R	23	11	11	12	5	
21	C	23	11	R	R	R	?	R	R	C		R	R	11	11	11	12	7	
22	C	28	11	R	24	27	?	0	36	30		28	R	R	R	R	R	8	
23	22	25	24	M	M	25	15	0	26	30	19	25	27	32	30	25	21	16	
24	22	25	15	R	15	13	C	23	26	15	17	15	M	31	14	14	21	14	
25	19	14	13	14	13	13	24	23	C	14	16	15	17	16	14	13	16	17	
26	14	28	11	C	R	M	27	C	C	13		29	C	31	15	24	C	9	
27	17	C	11	11	12	M	33	0	13	15	0	29	C	12	14	22	C	14	
28	23	C	14	C	13	13	C	0	M	18	19	30	C	16	17	12	C	11	
29	26	29	18	R	C	19	R	C	19	20		31	C	C	24	15	33	10	
30	15	M	14	M	C	15	M	C	17	22		C	R	C	22	15	B	7	
日數 Days	14	7	24	15	17	20	18	12	21	21	20	17	5	23	24	23	15	14	310
平均 Mean	21		12	19	12	14	12	5	16	19	7	21		20	15	15	17	14	

一人平均日數 17.2日

註 B=特別事情で缺測。 ?=相對數11以下で判明困難のもの。

★流星課報告 METEORS (132) 課長 小旗孝二郎 (K. Komaki, President)

愈々昭和17年も最後の十二月を迎へることとなつた。十二月の流星群は、十一月末からつゞく大熊座 μ 群、中旬の双子座群、20日頃の小熊座 β 群が著しいものであるが、その中、本年は月の關係から云つて双子座群の條件が極めてよい。下記の次第で同時観測計畫を立てた。多數の参加を希望する。

期間 十二月10日より15日まで (6日間)

時刻 毎夜23時より翌日1時まで (2時間の繼續困難のものは最初の1時間を選ぶこと)

方向 (視野の中心たるべき星座を示す)

A. 近畿班

大阪: Gem, 和歌山: Lin, 田上: Ori~Tau,

神戸: Gem-Can, 徳島: Lin~LMi, 観音寺: Leo~LMi.

B. 關東班

東京: Gem, 鎌倉: Lin, 甲府: Can~Leo.

方法 一般には肉眼観測によるが、寫眞機を持ち合せの方は、肉眼視野と同一方向に向けて、並行して観測をされたい。

例によつて十二月中の主要流星群の輻射點をかきける。

期 間	極大日 (Eq. 1942)	輻射點		附近の星	性 状
		α	δ		
XI月 16日~XII月8日	14.11日	155°	+39°	大熊 μ	速, 痕
XII月 7日~ 17日		113	+32	双子 θ	稍速, 短, 顯著, 輻射點移動
XII月上旬~ 中旬		119	+29	双子 β	稍速
XII月20日~ 22日		218	+78	小熊 β	タトル彗星と關聯

× × × × ×

和歌山縣橋本町の龜井啓一氏から珍しい流星の報告があつた。十月3日夜19時20分頃に出現したもので、南魚座に始まり、鶴座、むしめがね座、南冠座を経て、蝸座 η 附近で山に没するまで、實に繼續時間1分12秒といふ稀有のスローモーションであつた。發見當時色は青白色、光度は3.5等であつたが、漸次赤色になり、光度も3等に増光した。この流星は、去る昭和9年八月21日に、九州南方を飛び、怪飛行機とか、怪火、妖火とらわされた火球(天界第15巻第168號, 第169號)と軌を一にするものであらう。光度も、色も、速度も酷似してゐる。たゞ分裂などの事がなかつた爲廣く注意されなかつたものらしい。東海地方及び近畿四國の南部及南方海上に多少の實見者がある筈だ。これについて何等かの報告に接してゐる方は筆者まで御通知ありたい。